

理論の開発・活用のための中範囲理論 看護知識の構造から考える

“middle range theory”という用語が看護界で聞かれるようになってから久しい。看護界のいわば通例としてその用語は日本に輸入され、その名のとおりに“中範囲理論”として紹介された。すると、「また何か新しい理論が出てきた」「中範囲とは一体何を指しているのか？ どういう範囲なのか？」などという疑問も聞かれるようになった。現在“中範囲理論”という用語は我が国でも定着し、その重要性が叫ばれているものの、では中範囲理論がいかなるものであり、その重要性はどこにあるのかという点について、統一された見解が見いだされていとはまだ言い難いのが現状ではないだろうか。

中範囲理論の開発には、そのもととなる概念分析が不可欠になるのはいうまでもない。Walker, L.O. & Avant, K.C. の『Strategies for theory construction in nursing』は、理論構築の意義と方法について理解するための書として有名だが、その第4版(2005)が2008(平成20)年、『看護における理論構築の方法』(医学書院)として翻訳され、本焦点を企画するきっかけとなった。中範囲理論の開発をめざすためには、理論とは何か、概念とは何か、そして理論を構築していくための概念分析がいかに重要かといった点を、まずは十分に理解しなければならない。

筆者を含む星・林の3名が博士課程で学び、“middle range theory”の科目を履修した際には、博士論文の基盤となる、自己の追求する主たる概念を徹底的に分析することを求められた。本焦点では、このときのそれぞれの概念分析の論文を紹介する。同時に、中範囲理論が理論構築の構図のどこに位置しているのかを知るために、理論構築の全体像を概観するモデル図作成を試みたので、こちらも紹介し概説する。さらに看護学において理論とは何か、また実践の科学である看護にとって中範囲理論がなぜ重要なのかについて、3名の恩師でもあるDr. Reedに寄稿を依頼した。Dr. Reedは、焦点論文中にも言及する“metatheory”の担当教官であり、自身も“the theory of self-transcendence(自己超越理論)”という中範囲理論の開発者でもある。

本焦点を通して理論開発の意義を改めて見だし、中範囲理論の理解の一助となれば幸いである。我々の概念分析やモデル図にご批判を仰ぎつつ、中範囲理論開発に向けた議論の活性化と、これまで西洋の価値観で開発されてきた看護理論に対し、東洋の文化・価値観を基盤とするような独自の中範囲理論の開発へとさらに発展していけばと願っている。

*本焦点では、主たる用語について、Walker & Avantの原著に倣い、原語で表記した。訳が必要と思われる用語については、各用語初出時に、原語表記のあと()内に日本語訳を付している。また一部用語については簡潔な解説も加えたので、参照されたい。

(企画：金井 Pak 雅子 東京有明医療大学看護学部教授)